

研究ノート

## 観光実習アウトキャンパス・スタディにおける教育効果の指標研究

中澤 朋代

### 〈 目 次 〉

1. はじめに
2. 目的
3. 調査方法
4. 結果
5. 考察
6. 結論
7. 謝辞
8. 文献

## 1. はじめに

学生の講義への意欲をどのように高めるか、教員の誰もが常に考えている。その一つの手法として松本大学にはアウトキャンパス・スタディという教育制度が掲げられており、地域をキャンパスとして実践とともに理論を学ぶ科目が多く設置されている。しかし、この教育方法の評価手法はまだ研究途上の段階である。

今回は観光ホスピタリティ学科にて自身が担当する複数の科目において、アウトキャンパス・スタディの事前、事後の意識変容・教育効果を測ったアンケートの比較を試みた。計画段階の期待としては実習講義を受けたことで、①自身の（アウトバウンドを含む）旅行への意欲の増加、②自己理解が深まることにより、実習後に以前より積極的な旅行志向が見られること、③実体験を行い、講義を受けて理解が深まり、旅行を自身の成長の場ととらえ、ツアー等の経験を積む機会を積極的に得ようという姿勢が見られることを期待したが、アンケートからは顕著な変化は一部に留まった。一方で、レポートや感想からは次回の旅行への意欲が多数伺えた。

今回はこの結果を研究レポートとしてまとめ、今後、さらなる検証方法の研究につなげることをする。

## 2. 目的

本研究は、本学独自の教育制度として「アウトキャンパス・スタディ」があるが、実習を伴う大学講義における学生の教育効果を評価するための指標を作りたいと、その客観的方法を研究している。アンケート調査から導き出される実習の事前事後における学生の変化から、教育効果として考えられる指標の一部を取りだすことを目的とする。

## 3. 調査方法

### (1) 対象とするアウトキャンパス・スタディ

今回、教育効果の指標を抽出するにあたり、実際にアウトキャンパス・スタディと事前事後のアンケートを実施した科目を調査した。これは観光ホスピタリティ学科1年生を中心とした受講生90～100名を対象とした必修講義「エコツーリズムⅠ」（前期の開講科目・全15回・2単位）で、その概念を理解し興味を深めるために、実際にエコツアーを体験学習する方法で展開している。1年生前期の科目ということもあり、観光教育への動機づけが大きなねらいとなっている。カリキュラムは以下の通りである。

図1) エコツーリズムⅠのカリキュラム概要

テーマ	内容	開催時期（講義回数）
ガイダンス	・講義目的、履修のルール説明	4月（全1回）
アウトキャンパス・演習	・室内実習「お互いを知る・コミュニケーション実習」とふりかえり ・アウトキャンパス・スタディ「自然の見方・楽しみ方」とふりかえり ・アウトキャンパス・スタディ「エコツアー体験（5月頃、土日曜、日帰り）」とふりかえり	4月～6月（全7回）
講義・演習	・エコツーリズムとエコツーリズム産業の概要、社会背景 ・学生が自ら体験したことをまとめる（レポート） ・経営、これからの地域づくり&エコツーリズムを考える	4～7月（全7回）

学生はコミュニケーションやエコツーリズムの概念を学んだ後、身近な自然を体験する観察会を経て、1日を使った近隣県での「エコツアー体験」を、アウトキャンパス・スタディにて学習する。この科目は2006年から2011年にかけて最初の3年間は岐阜県白川郷で、後半の3年間は山梨県富士

山北麓の青木ヶ原樹海でのエコツアー体験実習を6年間行ってきた。どちらも専門の事業者のガイドが案内し、受講生が自ら体験し、考え、行動するものである。

本科目では体験カリキュラムに併せて、例年その効果を測定する目的でアンケート調査を行ってきた。今回は客観的な指標を作成するに当たり、事前事後のデータを取ることのできた2009年富士山エコツアーのアウトキャンパスにおけるアンケート結果とレポートを題材とする。

図2) 富士山エコツアー当日の概要

日 時：2009年6月27日（土）

参加者：「エコツーリズムⅠ」受講生73名（登録者104名、野球の公式試合・集中講義と重なり欠席者多数）

時間	内 容
9:30	松本大学 集合 <span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">時間厳守!</span>
9:40	バス出発（大型バス1号車、2号車に約40人ずつ分乗）
12:00	「道の駅なるさわ」第二駐車場着、富士山の見える景色で弁当昼食、トイレを済ませておく
12:45	インタープリターと合流、全体であいさつ <span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">時間厳守!</span>
	12:55 バスに再乗車
	13:05 富士山原生林・登山道入り口にてバス下車
	13:15 約20名が4コースに分かれてエコツアー開始（A～Dコース、ガイド付き）
	15:35 各コースのツアー終了
15:45	富士山原生林・登山道入り口よりバス乗車
16:00	「道の駅なるさわ」にて、全体での実習ふりかえり。トイレ休憩後、出発。
18:30	松本大学着

(2) アンケート調査の方法

標本とした2009年のアンケートは「どのような教育をすると、海外旅行に行く人材が育つか？」をテーマに、エコツアー経験を通じた海外旅行へのニーズの変化の有無を調査したものである。新しいスタイルの旅である国内でのエコツアー経験がエコツアーそのものだけでなく、「海外旅行」という、旅行者として次のステップとして考えられる未知の世界に飛び出すような、より冒険的な旅行先に対して、学習者が挑戦しようとする意欲の向上があるのではと仮定して実施した。

アンケートの設問には、①海外旅行経験の有無の影響、②旅への想像力、③生活文化環境の適度なギャップ、④訪問の理由、⑤自己投資への価値観を問うものを9項目作成し、基礎情報として学生の傾向を調査した。ただし、同様の内容で、事前と事後のアンケートをとった比較については、回答日程が異なるために出席・欠席による回答者数が若干変化し、また、国内エコツアーを通じて、海外への旅行をどう想像するかという“体験と展望のテーマの差異”が発生することにより、その効果が計りづらい可能性をはらんでいる。

<アンケート有効回答数>

事前アンケート 2009年5月実施 74名、対象：「エコツーリズムⅠ」受講生

事後アンケート 2009年6月実施 73名、対象：「エコツーリズムⅠ」受講生

アンケートは単純集計と同時に、海外旅行経験の有無に分けた学習者における事前事後の変化について、クロス集計を行った。クロス集計のデータは客観性を持たせるため、カイ二乗検定にかけ、

①全体の数値、②海外旅行経験者のみの事前事後比較、③海外旅行未経験者の事前事後比較、の3点から、統計的に有意であるかどうかを検証した。その結果、一部を除き、データの多くは優位性が見られなかった。しかし、今後の研究に向けてアンケートの集計から学習者の傾向と変化の兆候を拾うことを試みた。

### (3) レポートの調査方法

学生が事後に書いたレポートのコメントに代表される要素を、一文位置意味の文章に要約し、一次コードを作成し、一次コードとして類似するカテゴリを作成し、二次コードとした。この二次コードを構造化し、実習で得られた内容について分析した。

## 4. 結果

### (1) アンケート調査の結果

以下が、学習者の傾向と、エコツアー実習の事前事後に行ったアンケートの結果である。

- ① 海外旅行への意欲は、元々海外旅行経験のある人の方が高い傾向にある。しかし、観光教育を目的とした体験ツアーの参加により、事後は海外旅行の有無に関わらず両者の海外旅行への意欲が微増したが、統計的な優位さはなかった。(図3参照)
- ② 海外旅行の参加スタイルへの希望は、旅行経験のない人が「パックツアー」など事業者依存型の旅行を希望し、経験のある人が「友人の誘い」など手作りで面倒のない便乗旅行を希望する傾向にあった。ツアー体験後は、未経験者にアレンジ型旅行へのシフトが見られ、学生の研修旅行や招聘旅行については希望が微増した。一方で、旅行経験者では今回参加したような用意されたパックツアーの利便性に希望が流れるなど、旅行への意欲は高まったものの、手間と時間をかけてまでも旅行への価値が増大するような変化は認められない結果となった。(図4参照)
- ③ 海外旅行はどのような土地に行きたいか、現在住んでいる環境とのギャップを問うた質問では、未経験者は国内もしくはよりギャップの小さい旅行先を選ぶ傾向だったが、ツアー経験により、経験者・未経験者ともに冒険的な海外旅行への志向の割合が大きく増加した。統計的にみると、経験者よりも海外旅行未経験者の方に、よりギャップの大きい土地を訪れてみたいという志向の割合が増加した。(図5参照)
- ④ 海外旅行に行きたいと思うきっかけについては、ツアー後に「マスコミ情報」など間接的な情報への依存がやや減少した。尚、行きたくない理由については大きな変化はない。ツアーによる情報源の大きな変化は見られなかった。(図6参照)
- ⑤ 旅行先への訪問の理由としては、「視野を広げる」が経験の有無に関わらず共に大きく、ツアー後に微増した。実習後は経験者では「貴重な体験」の割合が減り、海外旅行への機会を今後も増やしたいという意欲が見られる。未経験者はツアー後に「人として成長したい」が増加したことから、旅という学びへの手ごたえが得られているのではと想像される。(図7参照)
- ⑥ 旅行に行きたくない理由としては、旅行経験者の「時間がない」がやや減少し、「旅慣れていない」という現実を直視した理由がやや増加した。統計的な変化は見られなかった(図8参照)
- ⑦ 海外旅行を一人で行ってみたいか、という設問については、実習後は経験の有無に関わらず「行きたくない」がやや減少傾向にあったが、統計的には変化は見られなかった。

図3) アンケート結果① 海外旅行への意欲

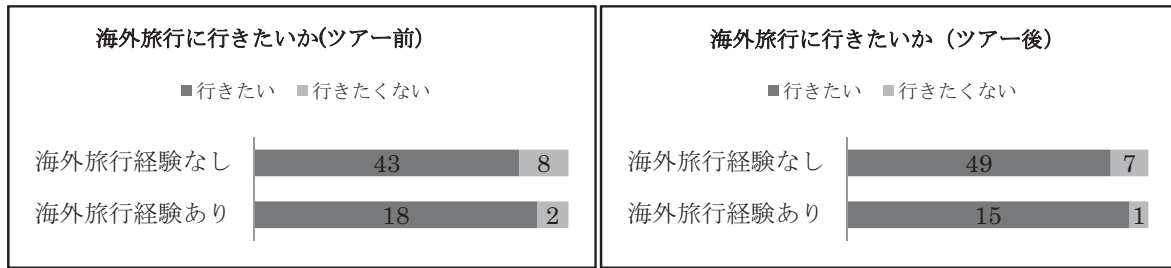


図4) アンケート結果② 旅行の参加スタイル

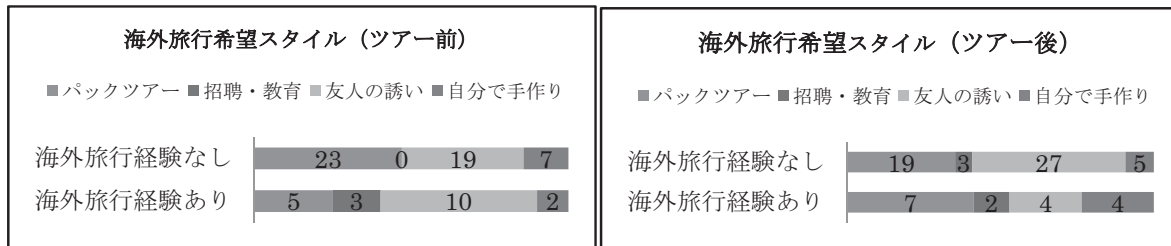


図5) アンケート結果③ 自分が住む土地とのギャップ

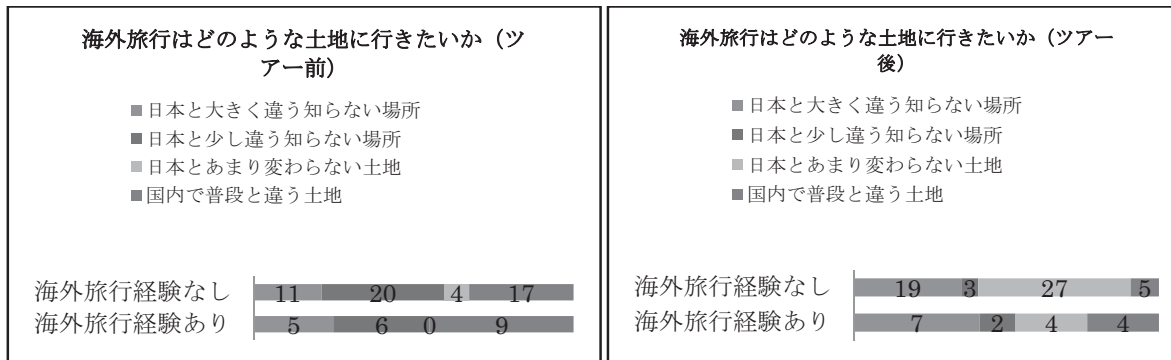


図6) アンケート結果④ 旅行に向かうための情報源

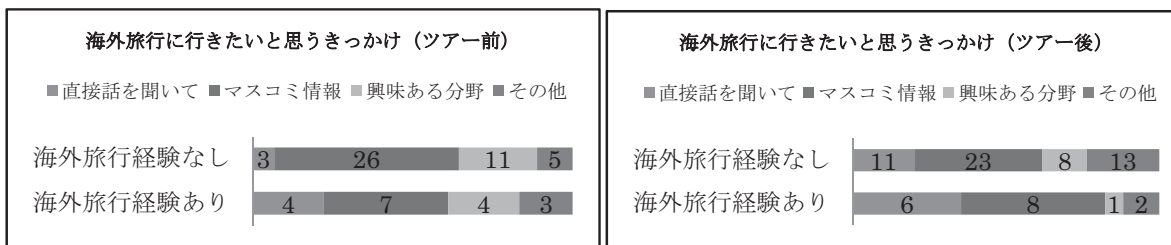


図7) アンケート結果⑤ 訪問の理由

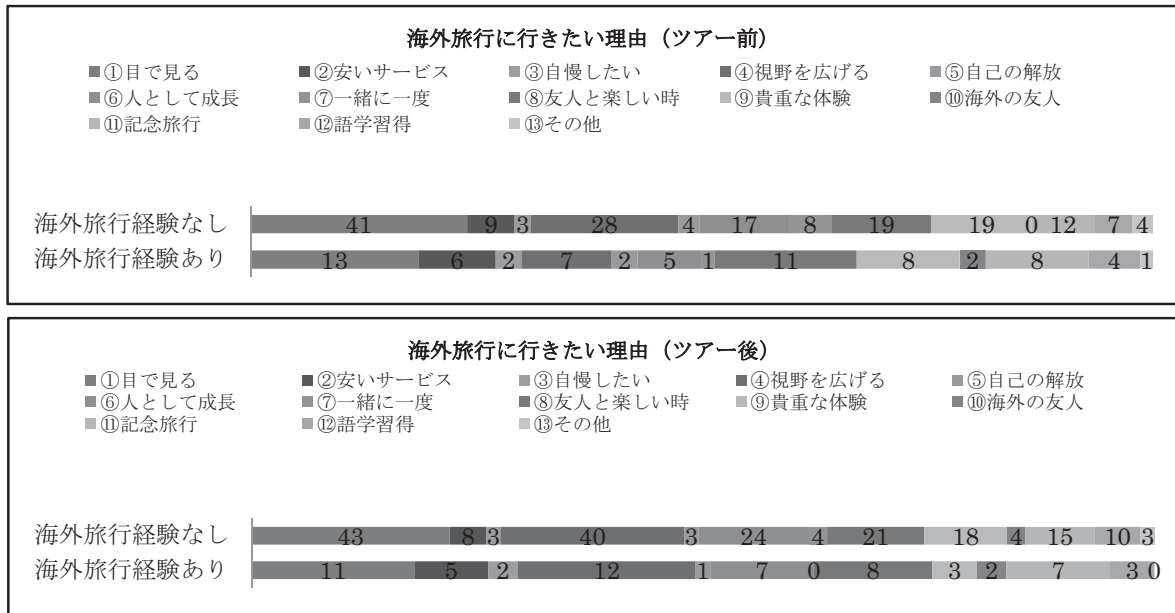


図8) アンケート結果⑥ 旅行に行きたくない理由

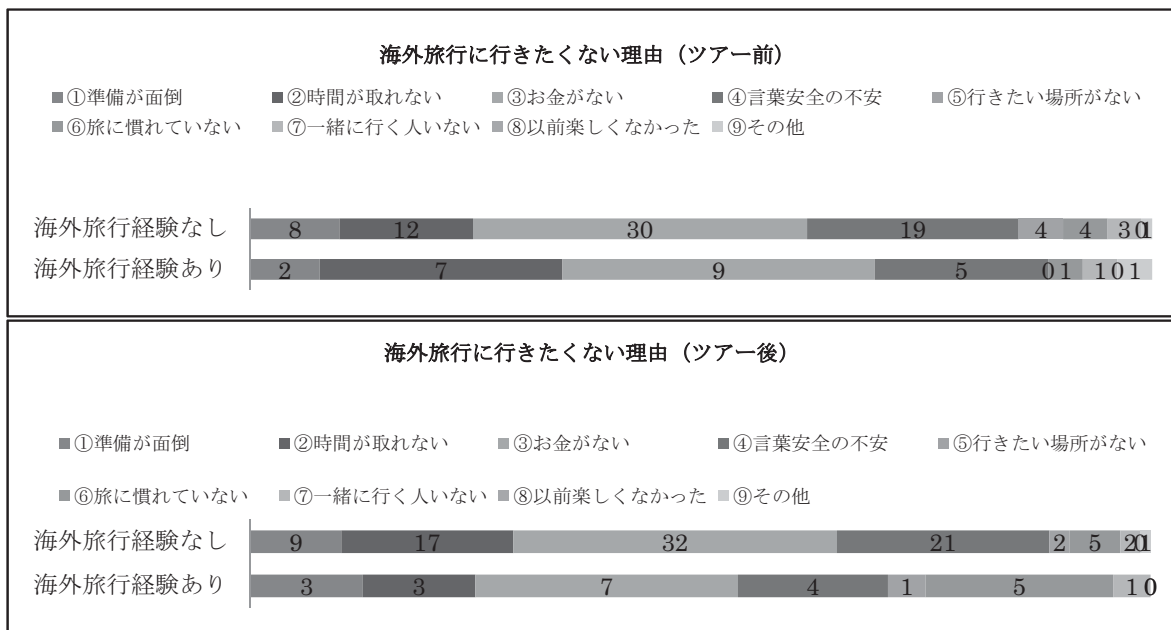
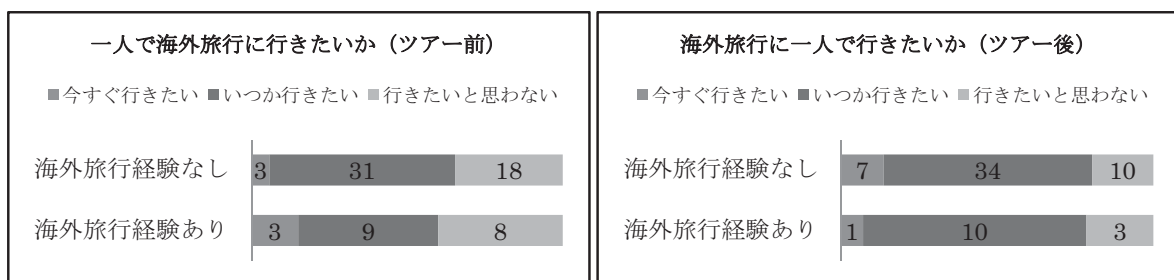


図9) アンケート結果⑦ 一人で海外旅行に行きたいか





## (2) レポート調査の結果

一方、学生のレポートからは、講義室での講義よりも実習型の講義について、多くのコメントや気持ちの込められた感想が出されている。アンケートの事前事後調査で反映されていない、学生の心の変化について、レポートの内容からキーワードを抜粋し、その効果の性質を検証する。

以下は、実習を終えた70数名の学生からのレポートから、事後の変化に関する代表的なコメントと思われるものの抜粋である。

- ・五感を使っているなことを感じることができた
- ・体験をすることにより、その土地に親近感が沸き、大切にしようという心が生まれる
- ・(エコツアーは) テレビなどでただ環境資源の保護などを訴えるのではなく、旅行企画に参加することにより、それらが抱える問題に様々な情報媒体よりも一番関心が持てる素晴らしいものだと思います
- ・エコツーリズムとは自然の中で行う“価値あるものの再発見”である、とアウトキャンパスに参加して感じた
- ・大自然を体全体で感じることができ、壮大な景色を目の当たりにして感動しました
- ・インタプリターの方のお話を聞き、樹海の中の江戸時代からの歴史も学べたし、交流も持てた。何より洞窟に入り、登山道を歩き、自然と触れ合うことで、いつまでもこの自然が守られてほしいという気持ちが出てきた。
- ・普段自然についてあまり考えることがなかった自分でも、エコツーリズムを経験して、自然のありがたみとか環境について見つめ直すべきだとか、いろんなことを考えさせられる機会を与えてもらった気がする
- ・旅行者自身もその地域を保護することを考えなくてはならない~このような地域に密着した観光がエコツーリズムである
- ・ただ自然を旅することだけがエコツーリズムなのではなく、その前の事前学習や心構え、旅の後の楽しかったと思える充実した内容の全部がエコツーリズムなのだと思う
- ・自分自身で感じ取ったことは忘れないし、そんな中で違う自分に出会えたら最高だと思う
- ・エコツーリズムとは“見せる”観光ではなく、“魅せる”観光だと私は感じた

レポートに書かれた文節のいくつかを一次コードとして分析すると、4つのカテゴリが抽出できた。抽出した二次コードとしてのカテゴリは<>で表現し、一次コードを{ }で表現し、下記にまとめてみた。

## ① &lt;学習内容への主体性&gt;

多くの学生たちは {五感を使って感じた} ことや、{目の当たりにして感動} した実体験を通じて、学習内容が加工された情報という知識の蓄積でなく、「自分ごと」として捉える経験の蓄積となる。さらに、{自分自身で感じ取ったことは忘れない} や、{実体験が一番関心が持てる} というように学習内容への関心が高まり、{旅行者自身もその地に責任がある} という一歩踏み込んだ感想も見られる。こうした傾向から、非日常の旅行先に対しても主体的で継続的な関わりを求める<学習内容への主体性>が多く見えるようになる。

## ② &lt;価値観の変化&gt;

さらに①の<学習内容への主体性>が思考のベースとなり、体験型旅行が現地の資源について {価値あるものの再発見} であり、{“見せる”観光でなく、“魅せる”観光}、{人とふれあいあってこそエコツアー} といったソフト重視型の観光形態であることに気づいた。アウトキャンパス・スタディが、多様で多量の情報を主体的に判断する過程から、旅行者や学習者に<価値観の変化>をもたらす教育的効果の高いものであると学生自身が体験から指摘している。

### ③ <親近感・価値の広がり>

そうした自身の<価値観の変化>から、旅行や自然そのものに対して {親近感がわき、大切にしようとする心}、{いつまでも自然が守られてほしい}、さらには自身だけでなく {こうした体験をより多くの人に味わってほしい} といった<親近感・価値の広がり>を期待する声が増えている。

### ④ <具体的情報と想像力>

ここまでの経過を経て振り返ると、体験の成果は {実際にしてみないと分からない} ことであり、情報量の多い実物に {触れて考えがより深くなる} ことを実感している。経験値がまちまちな学生にとって、講義室で繰り広げられる言葉から想像される範囲に留まりがちな思考が、実体験型の実習では自らがさらに {いろいろなことを考えさせられる機会} であり、{充実した内容全てがエコツーリズム} であるという結論に至っている。これを具体的情報が得られた結果の思考の深さとし、学習効果のカテゴリと整理したい。

## 5. 考察

### (1) アンケート結果の考察

上記アンケートの結果から、想定した旅行への意欲に関しては、残念ながら統計的には多くの項目に変化が見られなかった。その原因として、講義がエコツーリズムの概念を理解するための目的であったにも関わらず、旅行意欲の変化を測る指標にしたところに、無理が生じたのではと考えられる。しかし、微増の項目を見る限りでは、観光教育として位置づけている体験実習旅行を行うことにより、手ごたえとして、①体験により次の旅行への動機がやや増し、②未知の世界へ挑戦したいという動機が増す傾向があると考えられる。

また、旅行経験のある学習者にとっては、③旅への具体的イメージが継続し、過去の海外旅行で得られた旅行への価値を再確認する機会となっているし、旅行未経験の学習者にとっては、これまでマスコミ情報など間接的な情報から旅を敬遠したり、不安に思ったりしていたイメージが、④実際のツアー経験により具体的なイメージが自分の自信へと繋がり、⑤次への旅行の機会に向けた情報源の信頼度の変化や、⑥自身の旅へのポジティブな感情の変化に気づく効果が得られているように感じられる。

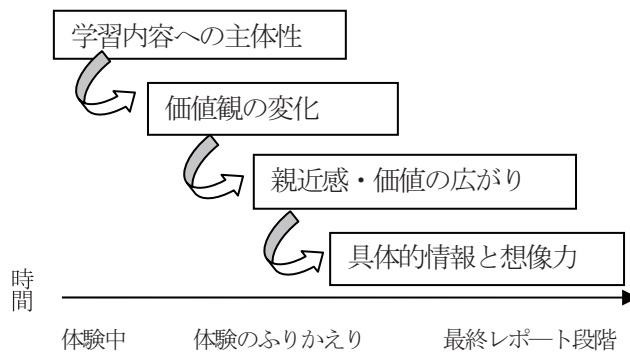
観光教育では、インバウンド、アウトバウンドともに、そのバランスもまた重要である。観光サービスに携わる人材が積極的にアウトバウンドという旅行に出かけ、主体的な学びの場とする習慣づくりは、観光教育においては重要なのではないかと考える。

### (2) レポートの考察

一方で、学習効果を中心に捉え、レポートのカテゴリを整理することに試みた調査では、学習課題への取り組みの姿勢や学習の深化に教育効果への可能性が見られた。アウトキャンパス・スタディの体験中、または直後では<学習内容への主体性>が現れてくるが、体験の内容をレポートやアンケートなどでふりかえる過程の中で<価値観が変化>し、学習対象や変化した価値観について<親近感・価値の広がり>を求めるように学習効果が発展していく。こうした主体的で自身の心に変化をもたらす体験は、具体的で多様な情報を自身の判断によって価値化したものであり、この具体的情報が元となり、より豊かな想像力が得られるというサイクルがあることが考えられる。これらの学びのプロセスを図式化したものを、以下に整理する。



図10) 体験的な学習のプロセスと変化



上記の変化から、各プロセスによる教育者の関わりと、学習者の主体性やその課題に関する思考の継続が、体験的な学習の教育効果を生み出す際に重要なポイントになると考えられる。

## 6. 結論

前述したように、今回の調査はこれらの変化を元にした、教育効果の指標づくりへの一つのステップと考えている。その視点から、今回の調査から本学のアウトキャンパス・スタディに代表される体験的なカリキュラムが、以下の点で効果を発揮すると整理したい。

### 【評価の対象とするカリキュラム】

事前学習、事後学習が行われ、体験学習自体が受け身としての見学だけではなく、学外関係者と関わり合いながら、自ら考え、判断し、行動する内容が含まれる大学での体験型講義を評価の対象とする。

例) ツアー体験とふりかえり、課題解決型ワークショップ、インターンシップなど

### 【今後有効と考えられる評価指標】

#### ①信頼する情報源

体験学習により、学習者は自身の体験による一次情報や、教育目的の情報に信頼を寄せるようになる。世間一般に氾濫する広く浅い、または商業的な情報だけではなく、第一次情報を重視し、質を表現する情報を自ら選択し、収集する力を養うことにつながる。

#### ② 学習への主体性

自分ごととして、または自ら学びたい意欲を増加させる教育効果が見られる。

#### ③ 具体性の獲得

体験学習により、学習内容への抽象的なイメージが具体的なイメージに変化する。知識レベルを問わず、具体性や現実感を獲得（再獲得）するため、自信を持ってその学習に取り組む姿勢が向上する。このことは同時に次の学習への意欲につながっている。

#### ④ 未知の体験への挑戦

体験の手ごたえにより、体験→実感→考察→豊かな想像へのステップが、自身の人間性を高める効果につながることを学習者自身が知り、次の未知の体験に挑戦する傾向がある。

以上、これらの指標を一つの成果とし、学生の自己評価、教員の自己評価が可能となるよう、さらなる今後のアウトキャンパス・スタディの教育効果指標の研究につなげていきたい。

## 7. 謝辞

本研究に際して、松本大学「教育推進助成費」より補助金をいただいて、研究を行うことができました。また、アンケート作成については佐藤博康先生、集計方法については統計学の林昌孝先生にご指導いただいたことをここに感謝いたします。

## 8. 文献

- 1) 西田真哉, 1999, 「体験学習法とは」, 野外教育指導者読本68-71.
- 2) 高田直子, 新井龍, 井村香積, 作田裕美, 坂口桃子, 2009, 看護学生における「患者の人権・看護論理の重要性」感得のプロセス, 滋賀医科大学看護学ジャーナル, 7(1), 31-34.